慢性微小炎症が発がんにつながる可能性

細菌やウイルスに感染していなくても、肥満や生活習慣などの影響により慢性の微小な炎症（慢性微小炎症）が体内で生じていることが報告されている。しかし、感染による炎症と同様に、慢性微小炎症が発がんに関係するかについては明らかにはなっていない。本研究では、アジア人における慢性微小炎症と 18 部位の発がんとの関連について検討した。

日本の大に規模研究に参加した、がんに罹患した患者 3608 例と対照群の 4432 例について中央値で 15.6 年追跡し、高感度 CRP 検査を用いて血中 CRP 濃度を測定した。毛中 CRP 濃度とがんの罹患について解析した結果、年齢や性別、喫煙、飲酒などについて調整後のハザード比は、血中 CRP 濃度の最低四分位群と比べて最高四分位群では 1.28 となった（傾向の P<0.001）。がんの部位別の解析では、大腸がん、肺がん、乳がん、胆道がん、腎臓がん、白血病において血中 CRP 濃度が高くなるにつれて、罹患リスクが高くなった。この傾向は追跡期間 3 年経過以降も維持された。

今回の結果から、血中 CRP 濃度の上昇ががんの罹患リスクの上昇と関連することが示され、症状のない慢性微小炎症が発がんにつながる可能性が示唆された。

出典：British Journal of Cancer. 2022 Feb 10 published online first.